

提瓶—水筒の形をした入れ物—



▶ 提瓶(正面)



▶ 提瓶(横から)

写真の土器は「提瓶」と呼ばれる須恵器です。須恵器とは、古墳時代中期、4世紀末から5世紀初め頃に、朝鮮半島から制作の技術が伝わり生産が始まった焼物で、轆で形を作り窖窯での焼成が特徴です。焼成の最後に酸素の供給を遮断するため、灰色に発色し硬く焼き締まります。

今回は、水筒の形をした提瓶を紹介します。提瓶は「さげべ」とも呼ばれ、液体を入れる容器です。古墳時代後期、6世紀から7世紀前半にかけて生産されました。肩の部分には、紐を通すために環状やかぎ状の耳が付けられますが、次第に退化して碁石状の形になり、最後には消滅します。これは用途がより儀礼的な容器に変わっていったことを意味しています。横穴式石室を持つ古墳や、祭祀の場から発見されることが多く、主に葬送儀礼や祭りに使われました。

今回紹介する提瓶は、市の南部を流れる花室川の北岸、大岩田地区の台地上で発見されたと伝えられています。現在は土浦三高の敷

地内で、一帯は五蔵遺跡として登録されています。かつては多くの古墳が存在していましたが、戦時中、旧海軍施設の建設により、これらの古墳は削平されたようです。現在でも周辺にはいくつかの古墳が見られ、また、土浦三高敷地内で行われた発掘調査でも、古墳の溝が発見されています。この場所は霞ヶ浦を臨む台地上で、見晴らしが良いことから、横穴式石室を持つ大きな古墳が存在していたのかもしれない。

提瓶を見ると、口の部分は欠けていますが、高さ約23〜24センチメートル、幅20センチメートル、厚さ15センチメートルの大きさです。肩には環状の耳が付けられています。器面は工具で叩いた後に、ロクロ回転を利用して櫛状工具で撫でた螺旋模様が見られます。胴部の面には十字の筋が見られますが、これはへら記号と呼ばれるもので、須恵器の職人が、自分の製品を識別するためなど、何らかの理由で付けたものです。

提瓶と一緒に、須恵器の杯、蓋、ハソウが発見されたといわれ



▲ 左から蓋、ハソウ、杯

ています。ハソウとは、15〜17センチメートル程度の丸い孔をあけ、竹など筒状の用具を差し込み、そこから液体を注ぐ容器です。このハソウは、文様や形の特徴から、群馬県で生産された可能性があると考えられています。

6世紀になると横穴式石室が全国に拡がり、石室内に須恵器を副葬することが多くなります。提瓶やハソウに酒、杯に食べ物を入れて、古墳に埋葬された権力者を弔う儀礼が行われたのでしよう。

今回紹介した提瓶は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場にて開催中の、夏休みファミリーミュージアムで展示しています。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場
☎026・7111